

「救いの架け橋になる」 I コリント9：19～23

## I 導入部

おはようございます。11月の第二日曜日を迎えました。今日も愛する皆さんと共に礼拝をささげることができますことを感謝いたします。今日は、青葉台教会の創立49周年の記念の礼拝です。今、青葉台は、多くの人々が住み、駅周辺もにぎやかになり、マンションや一戸建ての家も多く建てられ、お年寄りから幼児に至るまで、多くの方々が住む場所となっています。青葉台教会が建てられた頃は、ここから青葉台駅が丸見えで、周辺にはあまり建物もなかったようです。

来年は、創立50周年という大切な年です。勿論、今年の49周年も大切な年で、私たちは神様が、尾山台ナザレン教会の株分けとして14名の方々を中心に始まり、この地に青葉台ナザレン教会を建て、多くの方々が救われ、また、信仰をもって天に召され、今では約150名の方々が礼拝に集うようになりました。けれども、月報に書きましたように、私たちが思うほどに、感じるほどに、青葉台ナザレン教会は、知られていないというのが現実です。私たちは、イエス・キリスト様の十字架と復活を通して、与えられる罪の赦しと魂の救い、そして、永遠の命、復活の命を与えられていると信じ、イエス様を信じるのがどんなに幸せな事か、イエス様と共に歩く人生は、いかに有意義であるのかと知ることを知っている者として、体験している者として、教会の外にいる多くの人々に、イエス様の愛と恵みを伝える教会として、ここにこそ神様の愛があること、本当の幸せがあることを紹介させていただきたいと思うのです。

今日は、コリントの信徒への手紙第一の9章19節から23節を通して、「**救いの架け橋になる**」という題で、お話し致します。

## II 本論部

### 一、与えられた自由をもって仕える者になる

コリントの信徒への手紙を書いたパウロという人は、律法を厳格に守り、ファリサイ派として、神に仕えていました。十字架で死んだイエス・キリストを信じる者たちを批判し、攻撃し、徹底的に迫害したのがパウロであり、キリストを信じる者たちを異端者として裁くことが神に喜ばれることであると信じて熱心に、キリスト者を迫害したのです。

そのパウロが、ダマスコ途上において、復活のイエス様に出会い、イエス様を信じ、キリスト者となり、今度はイエス・キリスト様を救い主として宣教する者と変えられたのです。パウロは律法においても、神学的な事柄においても、知識があり、語るべきことを多く持っていました。けれども、彼は、イエス・キリスト様を伝えることに専念したのです。

彼は、ユダヤ人として律法を学び、律法に生き、様々な規則を守っていましたが、彼は、イエス・キリスト様の十字架と復活を信じる者に、信仰によって救いが与えられると語りました。ユダヤ人たちは、十戒を中心とする律法を守ること、行いが救いの条件だと語りました。

パウロは、ユダヤ人からは命を狙われ、異邦人からはおかしなやつだとバカにされ、多くの苦難を経験しました。多くの人々に、イエス・キリスト様による救いを語ってきました。そして、多くの人々が救われ、キリスト者として生きるようになったのです。

いつもパウロの頭にあることは、どうしたら多くの人々に福音を伝えることができるかということでした。ユダヤ人だけでなく、異邦人に対してもイエス様を何とか伝えたい、知ってほしいといつも思っていたのです。そして、彼の数々の経験の中から、パウロは語るのです。

9章19節で、パウロは「わたしは、だれに対しても自由な者ですが、すべての人の奴隷になりました。できるだけ多くの人を得るためです。」と語っています。

パウロは、誰にも支配されずに自由に自分の思い通りに語り、行動することができます。彼の人生は彼のものです。しかし、彼は全ての人の奴隷になったのです。奴隷とは、主人の命令通りに生きる人です。彼は、自分では自由に生きるけれども、イエス様を知った喜び、救いの恵み、罪の赦し、魂お救いを多くの人に伝えたいのです。だから、全てに人に自分の意志で仕える者となったのです。

かつて、パウロは律法によって縛られていました。しかし、イエス様によって解放され、自由な者となったのです。自由な者であるから奴隷にはならないというのではなく、自由な者であるからこそ、自ら進んで全ての人の奴隷になったのです。すべての人にイエス様を伝え、イエス様を信じて救われてほしいからです。それがパウロの望みであり、神様のおこころなのです。

## 二、全ての救いのために

パウロはユダヤ人にはユダヤ人のように、異邦人には異邦人のように、律法に支配されている人には、自分はそうではないけれども、律法に支配されている人のように、律法を持たない人には、キリストの律法、愛の教えには従っているけれども、律法を持たない人のようになったと言います。それは一人でも多くの人に救われてほしいからです。

ユダヤ人は、律法を忠実に学び、律法を忠実に生きることを大切なこととします。けれども、パウロはそのような生き方をしていた者ですが、イエス様によって、信仰によって救われました。そして、律法を行うということで救われるのではないことを体験しました。

そのようなパウロは、律法には支配されていないけれども、律法に支配されている人を得るために、律法に支配されている人のようになり、律法に関する話しをするのです。また、パウロは異邦人、つまり律法を全く持たない人には、律法を持たない人のように、律法を押し付けるのではなく、異邦人のよくわかる話題を提供して仲良くなるのです。

パウロが日本にいたならば、日本人のようになったのではないのでしょうか。生魚（なまさかな）なんて食べないでしょうが、寿司を食べたかも知れません。納豆はどうでしょう。

日本人を得るために、鼻をつまんで食べたかも知れません。日本人を救うためです。

アメリカから日本人を愛して、多くの宣教師が日本にやって来ました。アメリカと日本とは、考え方も違う。習慣も違う。環境も随分違う。けれども、日本人にイエス様を伝えたい。イエス様は日本人をも愛しているから、私も日本人を愛する。そうして、日本語もわからないまま宣教師は日本に来たのです。そして、日本の習慣に習い、日本人を愛して、日本の風土や環境に戸惑いながらも、生活し、宣教したのです。それは、パウロと同じ思い、「何とかして何人かでも救うため」なのです。

皆さんの中には、宣教師の先生に導かれた方もおられるでしょう。宣教師の愛に満たされた導きを受けて、教会に導かれ、救われた人もおられるでしょう。平原先生は、タイの人々にイエス様を伝えるために、今タイでタイの人となり宣教しているのです。

すべての人が同じようにならなければならないというわけではありません。その人に福音を伝えるために、その人のようになったのです。

### 三、隣人に配慮できる人になる

初代教会において、ユダヤ人に伝道し、救われるのがユダヤ人だけなら問題ありませんでした。しかし、迫害によってエルサレムから散らされた人々は、異邦人に福音を伝えました。そして、異邦人がイエス様を信じて救われて来た時、ユダヤ人中心のエルサレム教会では、会議を開き、どうしたものかと考えました。ユダヤ人がしているように同じことを強制的にさせることがよいのか考えました。そして、結論を出したのです。それは、偶像に備えた肉を食べること、あらゆる不品行、絞（しめ）殺した動物の肉を血を抜かないまま食べることを避けることでした。ユダヤ人が割礼を受けているように割礼を受けることや、律法を忠実に守ることは言いませんでした。異邦人は、ユダヤ人のように、律法にはあまり触れていませんでした。だから、異邦人には異邦人のようになったということではないでしょうか。

日本のキリスト教会は、アメリカから来たキリスト教の流れに従って、教会での集会や交わりをしています。また、宣教の働きをしています。しかし、これはアメリカ式キリスト教の生き方だと思います。日本人には日本人のようになった、とパウロが言うように、日本人にあった礼拝の様式、宣教の仕方があるようにも思います。

私たちは、毎週のように賛美歌を歌い、聖書を開き、祈りを捧げます。けれども、教会に初めて来る人々は、賛美歌も、祈りも、聖書の言葉も知らない人が多いのです。今は、ホームページで、教会の様子や礼拝の様子、説教などを聞いて来る人もいます。けれども、それは、ほとんど知らないのと同じだと思います。

教会では、結婚式が行われ、キリスト教式の結婚式にあこがれる女性も多いでしょう。クリスマスは教会でと、クリスマスぐらいは教会でと思っている人も多いでしょう。けれども、神の言葉である聖書はわかりにくいのです。罪がなんであるか日本人にはわかりにくいのです。ですから、4つの法則の伝道方法で、神、罪、救いを説明してというのにも無理があるのかも知れません。福音を伝えることは必要ですが、その前に人と人としてのかかわり、関係、交わりを大切にしたいと思うのです。パウロが言った、「弱い人に対して

は、弱い人とのようになった。すべての人に対してはすべてのものになりました。」と言ったのは、その人との人格的な交わり、同じ立場になる、目線を合わせるといようなことではないかと思うのです。

パウロは、「福音のためなら、わたしはどんなことでもします。」と言いました。それは、福音のためには手段は選ばないというような意味ではありません。日本人は、なかなかイエスを信じないから、脅してイエスを信じると誓わせる、というようなことではありません。リビングバイブルには、「キリスト様のことを話し、その人が救われるためには、私はどんな人に対しても、対等の立場に立とうと心がけています。」とあります。この前では、「ささいなことで、すぐに良心を悩ませる人たちのそばでは、自分の知識をひけらかすような行動をしたり、「それは考えが足りない」などと指摘したりはしません。」とあります。これは、「弱い人に対しては、弱い人のようになりました。」ということです。

私たちの青葉台教会は、このような生き方、このような宣教の在り方で、多くの人々にイエスを紹介したいと思うのです。

### Ⅲ 結論部

青葉台教会は、創立49周年を迎えました。多くの人々にイエス様を知ってほしいと数々の集会を計画し、集会を開き、多くの人々が集い、神様の愛に触れ、イエス様を救い主として受け入れた方々がいます。しかし、反面、この教会から離れた人々、去って行った人々がいることも事実です。その理由としては、牧師に対する事柄、教会員の方々同士の事柄、奉仕や献金に関する事柄、礼拝出席に対する事柄、その他もろもろ。もしかしたら、私たちもアメリカ式キリスト教の生き方をまたは、律法的な生き方を優先したかも知れません。

パウロが言う「何とかして何人かでも救うため」というのは、クリスチャンの数を増やすためではありません。キリストの救いにあずかり、神様を排除した人生から神様を中心とする人生に変えられるという本当の幸せな人生に生きることなのです。

私たちの考える教会生活や礼拝の在り方、奉仕の働きが律法を行うかのような強制や規則のような生き方ではなく、力や権威で動くようなことではなく、イエス様が十字架でいのちをささげ身代わりに死んで下さったこと、そして、よみがえり復活の命にあずかったことを信じて、私たちは、与えられた自由を、あるいは、賜物を権威を人々に仕えるために用いたいと思うのです。今の礼拝の在り方、時間の範囲でしか礼拝に来れないというのではなく、どんな人もいつでも教会に来ていい。キリストのもとに来ていいのです。

私たちの青葉台教会は、律法に支配されることなく、キリストにあって自由な者として、喜んで賛美し、礼拝し、感謝に満ち溢れた教会生活をしたいと思うのです。

私たちは自分の事しか考えないというのではなく、隣にいる人、近くにいる人、かかわる人々の様子を見て配慮できる者、イエス様の愛をいただいた者として、愛にあふれた交わり、かかわりをしたいと思うのです。この週もいろいろな人に出会うでしょう。私たちもパウロのように、すべての人のようになり、救いの架け橋になりたいと思うのです。